琉球大学学術リポジトリ

内なることばを培い，学習主体を育む授業づくり 琉歌創作指導の可能性を探る

メタデータ	言語: Japanese
	出版者: 琉球大学大学院教育学研究科
	公開日: 2022-05-26
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 名冨, 綾乃
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.24564/0002017970

内なることばを培い，学習主体を育む授業づくり

琉歌創作指導の可能性を探る

名冨　綾乃

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・浦添市立浦西中学校

1.　テーマ設定の理由

日々の授業において，どの生徒も主体的に生き生きと学習に取り組む姿が見られることを望んでいる。しかし実際の教室の中の生徒は，孤立していたり，学習に対して諦めを感じていたり，自分の内にある思いを表現することなく沈黙を選んだりなどといった姿を見せることのほうが多い。このような課題を抱える生徒の本音を聞き出し，思いを受け止め，かれらが意欲を持って学習に臨むことのできる授業づくりができないものか試行錯誤を重ねている。そのような中，思いがけず，普段の学習には乗り気でない生徒や，不登校傾向のある生徒も，意欲的に課題に取り組む場面が見られたことがあった。それは，郷土のことばや文学に触れ，さらに自らもそのことばを使って琉歌を創作するという活動を取り入れたものであった。

沖縄県は『わかる授業 support guide』のはじめに，これまでも沖縄県では，学校・社会・家庭において，郷土を愛する心を育む取り組みが行われてきたことを挙げ，それにより，郷土の歴史・文化・芸能等の大切さに気付くとともに，自信と誇りを育んできたと述べ，さらに「これらは人生の節々で，どこにいても無意識のうちに思い起こされ，心の支えとして働くものと考える。」と，郷土に関する学びが，子どもたちの「心の拠り所」「心の支え」となることを示している。

教室の子どもたちが主体的に学べる環境をつくるには，かれらに教室や授業に安心感を持たせることが必要である。先に述べた単元で，普段は心を閉ざしがちであったり，授業に参加することを拒んだりする生徒たちが学習に乗ってきたのは，創作活動のなかで，自分の思いを表現しても良いという「安心感」を感じたからだと考える。このとき，その心の内側にあることばを表現するツールとして，郷土のことばや文学と出会い，そのスタイルを借りたことが功を奏したとも考えられる。そこで，郷土のことばや文学の学びが，自尊感情や学ぶ意欲を高め，生徒の主体的な学びを促すことにつながることを明らかにしたく思い，本テーマを設定した。

2.　研究目的

郷土の伝統的な言語文化と学習者とのつながりをもとに，これまでの副教材や授業について分析し，考察することによって，琉歌の創作指導の可能性を探り，学習者の「自分の内側にある思い」を表現する力を培うことのできる琉歌教材の開発と，鑑賞から創作へつなげる単元を提案する。

3.　研究方法

(1) 古典教育指導や，地域の伝統的な言語文化の学び論，韻文の創作指導などの先行研究の論点を踏まえ，これまでの琉歌創作の授業を省察する。

(2) 琉歌の教材的価値や指導のあり方を明らかにするとともに，その意義と課題を導き出す。

次年度は，その課題を乗り越えるべく編み直した単元モデルを開発し，実践検証を通して，中学校国語のカリキュラムのなかに琉歌学習をどのように位置づけることができるかを明らかにする。

4.　研究内容

(1)　主体的な学びと安心した居場所について

学習者が主体的になるために必要なこととして，秋田喜代美（2020）は「まずその子どもにとっての安定・安心した居場所が学級や授業において創られていること」と述べている。先の実践の中で子どもたちが主体的な姿を見せたのは，教室が「安心した居場所」となったからだと考えられる。なぜ琉歌学習が子どもたちの安心につながったのだろうか。自分の思いを心に浮かぶ言葉そのままで表現しても良いという「安心感」や，琉歌を通して，自分と周りとの「つながり」を感じたことによって，教室を超えた「安心した居場所」を感じることができたのだろうか。それらについて，以下の先行研究を通してさらに探究していきたい。

(2)　古典文学教育論

古典文学の教育について，益田勝実（1967）は「自己と民族のことばの芸術の歴史，現代に生きることと前近代のことばによる想像が向き合うための教育である」（下線引用者）として「現代人と歴史との内面的なつながり，現代人と民族の文化の伝統と内面からのつながりの実体験が可能な，唯一の教育の場」と述べている。渡邊春美(2018)は，「古典は，ことばの契機を通し，文学として機能させることで，現代を生き抜き，未来を開拓するエネルギーを得る時出現する」とする益田の論考を引用し，「学習者の積極的，主体的な読みによって個々の中に立ち上がり，意味づけられ，学習者の生活と精神を相対化し，認識，感動，示唆，指針，反省を新たにさせ」，「古典の価値は，先験的にあるのではなく，学習者の主体的な読みによって創造的に見い出される」とした古典観を「『関係概念』としての古典観」と定義づけた。本研究では，この「関係概念」としての古典観に基づく立場に立ち，沖縄の古典文学である琉歌の鑑賞から創作に発展させる指導を構想する。

(3)　地域の伝統的な言語文化の学び論

沖縄の伝統的な言語で綴られた古典文学に触れる機会を授業の中に取り入れることは，沖縄に生きる現代の子どもたちに，自分の内面と「祖先」や「いのち」「育った土地の自然や風土」「歴史」とのつながりを体験させ，それらが「心の拠り所」「心の支え」となり自尊感情を育む基盤を強くするものとなり得ると捉えられる。益田勝実が言語を＜外言＞本位に見ることの問題点を指摘し，「ことばの根，ことばの土を養うことなしに言語教育がなされるわけがない」としていることを引用しながら，村上呂里(2019)は次のように述べている。「すなわち，学習者の＜内なることばの国＞を形成する上で，『古典遺産』＝『伝統的な言語文化』学習は大切な意味を担い，同時代の文学や生活言語と持続的に作用し，学習者の表現力を培うのです。」ここで益田や村上が述べているように，「ことばの根」を掘るという視点で沖縄のことばを取り扱うとき，生徒たちは古い沖縄のことばが古語と歴史的な「つらなり」を持っていること，それらのことばが生きる土地での人々との「つながり」があることを身をもって感じていくことができる。この歴史・時間という縦の軸と，地域・土地という横の軸の交差する「今」に自分が生きていることに気づいたとき，子どもたちはこの「つながり」のもとに自分の「命」があり，そのかけがえのなさを知り，沖縄県が「郷土の学びが子どもたちの自尊感情を高めることにつながる」と提唱することにも関わると考えられる。

(4)　郷土教材開発と国語科カリキュラムへの位置付け

古典文学教材について益田は「根の深い，根源的な民族のつかみ直し」のために「古典はたえず発掘しつづけなければならない」と述べ，古典文学教育体系試案を示した。そのなかで「南の日本・北の日本」と項立てて，アイヌと沖縄の古典文学に出会わせることを提案している。沖縄の古典文学としてはオモロ歌謡から「天にとよむ」と「あがる三日月」を取り上げた，「南の日本・北の日本」という発想は，平成 23 年度の小学校国語教科書に引き継がれた。府川源一郎（2005）も「学校から言語文化を地域に降

ろしていくような教育ではなく，あたらしく学校教育の内容を編み直していくような言語の教育を構想する必要がある。ことばの教育が地域の生活と密接につながり，また地域からも学校のことばの教育についての示唆が得られるような『国語』教育が求められている」と，地域教材を扱う学習を国語科のカリキュラムの中に位置付ける必要があると提言しており，沖縄県を「もっとも体系的にそうした作業に取り組んできた」としている。そこで今回の研究では，これまでに編まれた副読本の中から，特に琉歌について，どのような作品が採録されているか，どのような視点で指導を行おうとしてきたのかを明らかにし，鑑賞や創作の指導に活かせる教材の開発を検討する。

(5)　授業実践の考察

今年度は，新型コロナウイルス感染症対策等による諸事情により，連携協力校においては，琉歌創作に関わる授業ができなかったため，令和元年 12 月に，所属校の２学年の４学級（120 名）を対象にした実践について理論に基づき考察した結果を以下に述べる。

①　単元名「うた　ちゅくてぃ　んーら（歌をつくってみよう」

②　単元の指導目標　琉歌の創作を通して，先人のものの見方，考え方に触れ，自らの思いや考えを表現する力を培うこと。〔知識及び技能〕(3)【我が国の言語文化に関する事項】イ

③　資料『しまくとぅば読本』（中学生向け）

④　主な言語活動　先人の琉歌作品に触れ，しまくとぅばを使って自作に挑戦し，できた作品にイラストを添えてカードにする

⑤　単元の流れ（表１）

表１　単元の流れ

第一次	1	琉歌と出会う。内容・形式などを知る。
第二次	2	参考にしたい琉歌の共通語訳を参考に，四句構成の詩を作る。
	3	自分の詩をしまくとぅばに翻訳し，八八八六音の形式に整える。
第三次	4	学級の友だちと，互いの作品を共有する。

⑥　実践から見えること

・内容について

琉歌の持つ八八八六音の韻律は，学習者にとって親しみやすく，（押韻の技法がラップに通じる良さと憧れを感じさせるなど），ことばを乗せてみたいという意欲を抱かせた。また「屋嘉節」の歌詞などに見られるように，琉歌が人々を励まし合い，支え合う文化を担ったことなどを学習者自身が発見することにより，生徒の作品に平和を願うものや人々と励まし合い支え合うという琉歌観が生まれ，より明確な目的（誰に何を伝えたいのかなど）をもって創作に励む姿がみられた。

生徒A「なにを書いたらいいのかわからない」
指導者「気に入った作品を選ぶだけでもいいよ」
生徒A　（友だちと相談しながら）「『ふみらりん　すぃかん　すしらりん　すぃかん　うちゆ　なだやすくわたり　ぶしゃぬ』（褒められるのも好きではない，誹られるのも好きではない。浮世は穏やかにわたって行きたいものだ。程順則）」が面白いかな」
指導者「どうして面白いと思ったの？」
生徒A「琉歌（ならもっと良いものを書くはず）なのに，スカン　スカンって言っているし，ラップみたいだから」
指導者「スカン，スカンって言わないほうが良いの？」
生徒A「（作者は）反抗期だろ（笑）？俺も『学校や好かん，勉強も好かん』って言ってもいい？」
指導者「いいけど。じゃ，なんで来てるの？」
生徒A「友だちに会いにさ。あ，まって。先生に会いに来たって言おうか？」
生徒A「ほら，あの登校支援の○○（先生の名前）。（友だちに向かって）あの先生，しまくとぅば好きだぜ。しょっちゅう俺に『くがにくとぅば』（方言によることわざ）をためになるよーって言って教えてたし。」
指導者「いいね。じゃ続きはそれを書いたら？」
生徒A「学校や好かん，勉強も好かん。（指で音数を数えながら）だけど，せんせいに，会いに，来たさ。（友だちと顔を見合わせて）おー，ちょうど（8・6音）だ」
指導者「いいね。どうする？このままでもいいけど，しまくとぅばにできる？」
生徒A「できん。あ，待て。（友だちに向かって）『だけど』は『やしが』にできるあんに」「『先生』はこの本（しまくとぅば読本）にあったな」「『来たさ』はどうする？」
指導者「『来ました』で調べられるかもよ。」
生徒A「わかった。」

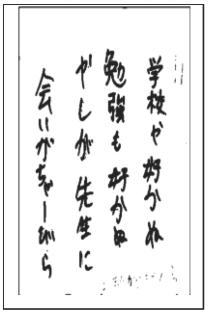

図１　生徒との対話と作品

・創作指導における対話の重要性

琉歌創作の過程で，創作の参考となりそうな作品を提示したり，学習者自身の体験を想起させたりしながら，学習者の内側にある思いが「表現するに値するもの」であると価値付ける対話を重ねることは，

学習者を主体的な学びを促す上で重要である。こうした詩の創作指導における教師の働きかけについて，春日由香(2011）は，「児童が詩を創作する過程において新しい自己を発見し変容していく時に，書き手が自己の内面的な変化に無自覚であっても，教師が『今，ここ』で営まれている対話の意味について自覚的であり，書き手を賞賛し共感的に関わるならば，教師は児童詩創作指導において『対話的他者』としての役割を遂行することになる」としている。また春日は，「教師は書き手の自立的でかつ活動的な思考を促進する『対話』の内容を意味づけ，かつ，そこで生まれた詩を文化的諸領域からも価値づける力量を支柱としながら『対話的他者』であることに自覚的でなくてはならない」と指摘している。図１の生徒Ａと指導者との対話の例では，始めは混沌としていた生徒が，自分の中の新しい気持ちを発見し，変容しようとしているときに，指導者が共感的に支えることで「内なることば」を引き出す役割と，琉歌の文化的領域の見通しを持って創作に至らせる役割とを担ったと言えるのではないだろうか。

・定型の支え

生徒の作品のうち，「もしか（もしも）」で始まる作品が全体の約２割を占めた。これは「もしも～なら～したい」という型の作品に倣ったものと思われ，中学生にとって，上の句に仮定，下の句に願望というスタイルが自分の思いを乗せやすいと感じられたと考えられる（図２)。このように既存の琉歌の型を使い，自分の気持ちを表すことばに置き換えることで，率直な気持ちを表現しやすくなり，パロディとしてのユーモアを表現することができた生徒もみられた。

図２生徒作品

・「しまくとぅば」から「つながり」を感じ取る

「しまくとぅば」を用いることにより，これまで自分に注がれてきた「しまくとぅば」を，様々な人物やエピソードとともに想起し，それらとのつながりを感じ取ることで，創作への意欲が喚起されたと思われる作品も多く見られた（図 3)。家族や地域の人々に「教えられてきたことば」を使って，その人々に対する「アンサーソング」を作ってみたいという思いにさせることができた。

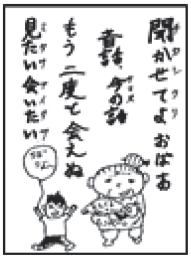

図３生徒作品

5.　課題をふまえた今後の研究について

これまでの研究から見える課題と，今後の研究の予定は以下の通りである。

(1) 沖縄の中学生とって琉歌学習が持つ意義や教師の対話的役割，鑑賞から創作につなげるプロセスを，実践に基づきさらに解明していく。

(2) 短歌の学習から和歌の学習に移る間に扱うなど，国語科教科書と関連付けた単元モデルを作成し，国語科のカリキュラムへの位置づけを具体的に提案する。教材については，これまでに刊行された郷土文学の副読本などを参考に，中学生に出会わせたい作品を選定する。いくつかの単元モデルを作成し，多くの先生方と共有，実践しやすい単元として提案できるようにする。

＜引用文献＞

秋田喜代美,2020,　『資質・能力の育成と新しい学習評価』ぎょうせい.

府川源一郎,2005,「地域言語文化の発見と創造」『国語科小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』学文社.

春日由香,2011,「対話で言葉の世界を広げる児童詩創作指導」『国語科教育』69：67-74.

益田勝実,1967,「＜現代国語＞の必要とするナショナルなもの」『国語通信』94（幸田国広編，2006,『益田勝実の仕事５ 国語教育論集成』筑摩書房所収).

村上呂里・萩野敦子編，2014,『沖縄から考える「伝統的な言語文化」の学び論』溪水社.

渡辺春美，2018,『「関係概念」に基づく古典教育の研究』溪水社.